

# フランスにおけるダンディズム： その受容と変容

小室 廉 太

## 序

本論はフランスにおける19世紀前半におけるイギリス文化の受容、とりわけ男性ファッションの受容を、「ダンディdandy」という単語の使用をめぐって考察する。論を進めるにあたって、2つのテキストを読解する。すなわち、オノレ・ド・バルザック作『優雅な生活論』<sup>1)</sup>とバルベール・ドールヴィイ作『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』<sup>2)</sup>である。

## 第1章 「ダンディ」の変容

言葉とは、その言語圏の文化の象徴である  
風間研 『舞台の上の社会』

オノレ・ド・バルザックは1830年の『優雅な生活論』<sup>3)</sup>において述べている、「ダンディズムは優雅な生活の邪道であり<sup>4)</sup>」、「ものを考えろと言って

1) Honoré de Balzac, *Traité de la vie élégante*, Paris, Arléa, 1998

2) Jules Barbey d'Aurevilly, *Du Dandysme et George Brummell*, Paris, Édition Payot, 1997

3) オノレ・ド・バルザック (山田豊子訳) 『風俗のパトロジー』, 東京, 新評論, 1982

4) *ibid.*, p61

も…頭は空っぽ。流行の中に流行しか見ないのは馬鹿である」という。バルザックに言わせれば、ダンディズムとは愚かな者たちが単にファッションに関心を持っているに過ぎないのである<sup>5)</sup>。

バルザックを崇敬し、その死（1850年）の際には「自らの師であり、巨匠である」と評したバルベール・ドールヴィイは、しかし、1845年、バルザックのダンディ評に反論する。ジョージ・ブランメルを単なる、しかし完全なダンディだとみなし、ダンディズムの思考を提示して見せている、「人は彼（註：ブランメル）を単に見かけだけのものだと考えていたが、その逆で、彼の持つ美しさの全ては知的なものであったのである<sup>6)</sup>」。1853年の『優雅な生活論』新版の評論でも、バルベールは暗にバルザックを批判している、「ジョージ4世やブランメル、シェリダンに欠けているのは思想ではない。（…）ダンディ達は必ずしもバルザックの述べているような者ではない<sup>7)</sup>」。バルザックとバルベールにおけるダンディに対する意見の相違はどこに起因するのか。

我々はこの変化を『優雅な生活論』と『ダンディズム』を2つのテキストの時代背景の変化に従って考察してゆこう。いくつかの問題が我々の考察の方向性を指し示す。まず、「ダンディ」という言葉の、フランス語における用法とその歴史である。バルザックのダンディに対するネガティブな見方の一つは、この時代における語義に起因することを予め述べておく。もう一つ、より重要な問題がある。すなわち「優雅な生活」と「ダンディズム」の根本的な違いである。とりわけ感情に関する表現に注目したい。

---

5) *ibid.*, p62

6) Barbey d'Aurevilly, *Du Dandysme et de George Brummell*. Paris, Édition Payot, p74

7) Barbey d'Aurevilly, « Honoré de Balzac », *Le Pays*, le 10 mai et le 22 juin 1853. in Jules Barbey d'Aurevilly, *De Balzac à Zola*, Paris, Les belles lettres, 1999, p 9

## フランスにおける「ダンディ」の定義とそのイメージ

奇異に思えるのは、「ダンディ (dandy)」という語は今日、ポジティブな意味で用いられていることである。例えば、プチ・ロベール辞典では以下のように記されている、「1817年初出。英語由来の語源不明の単語。服装やその立ち居振る舞いにおける、至高の優美さを誇る男性（19世紀における優美な男性の典型)<sup>8)</sup>」。この単語における「優美さ *élégance*」というのは、「至高の *suprême*」ものであり、この定義をまともにとらえるなら、バルザックの「優雅な生活」論こそが「ダンディズム」の異端であると捉えられるのではないか。

英語における「ダンディ」の語源は諸説ある。17世紀初頭から使われている *Jack-a-Dandy* (嫌な奴, 低劣な奴の意) の縮小語であるという説。またフランス語の *dandin* (間抜け) を借用した説。あるいはヒンズー語で「杖をつく人」を意味する *dandi* (インドの高級官僚) に語源を持ち、1815年以降、衣服や生活様式で際立つ貴族階級に用いられるようになったという説。あるいは、ヘンリー7世の統治下で作られた、価値のない小さな銀貨を *dandiprat* と呼んだことから、下劣で軽蔑すべき人間を指すという説。いずれにしろ、語源は明確ではない。

プチ・ロベール辞典が示すように、この言葉がフランス語で初めて用いられたのは1817年である。前年の1816年にイギリスで記された、モーガン夫人作『王政復古下のフランス』<sup>9)</sup>の仏訳においてである。ちなみに1816年は、「ダンディの王」と呼ばれたブランメルが、借金のために秘かにフランスに逃亡した年でもある。

モーガン夫人はこの作品の中で、イギリス人のダンディとの出会いを描いている。その内の一人は「現代ファッションの稀な見本の一つである」ダンディである。

8) Article « dandy », Le nouveau Petit Robert, édition 1993

9) Sidney Morgan, La France 2 vol. : Paris et Londres : Treuttel et Wurtz, 1817. pp175-176

(その男は)手にしたオペラグラスにしか興味が無い素振りで、自分が鑑賞にやってきた素晴らしいコレクションの品々に関心なさそうに、憂鬱な様子で一瞥してゆく。そして、それら貴重な宝物すべてよりも注目に値する、有名で気品のあるその所有者に対して、一言も言葉をかけず、一瞥さえしない。ドゥノン氏にとって、この場面は、客の礼節の欠如にショックを受けるよりも、寧ろ面白く思えた。それで、氏は注意深く、興味津々にその男を目で追った。私は氏の瞳に、この時代の珍奇な人間を、彼の人形や彫像のコレクションに加えたい欲望を見てとった。現代ファッションの稀な見本の一つが姿を消すと、ドゥノン氏は笑いながら肩をすくめて言った、「ダンディとは何とも奇妙な風体ですな！」<sup>10)</sup>

この、フランス語における dandy の最初の例文は、その含有する意味を十分に伝えるものである。この時代のダンディの態度とは、まさしく意図的な「礼儀作法の欠如」によって特徴づけられているのである。

スタンダールもまた、1817年に当時のダンディを批判している。すなわち、「才気があまりなく、あらゆる野望の下位に位置する」者である<sup>11)</sup>。この意味合いにおいて、ダンディとは才能のない、したがって野心を持ちえない者になる。1822年の『恋愛論』において、スタンダールの批判はさらに激しくなる。すなわち、ダンディとは「クラヴァット（当時の胸元を隠すスカーフ。現代ではネクタイの意）を上手に身につけることと、ブローニュの森で優美さをもって自らを顕示することしか知らない馬鹿者<sup>12)</sup>」である。もう一つ例を挙げよう。1820年に出版された、ロンドンの風俗に関する著書で、エティエンヌ・ジュイは、ダンディをフランス語で「過度に

10) Sidney Morgan, *La France* 2 vol. : Paris et Londres : Treuttel et Wurtz, 1817. pp175-176. 引用は以下による。John.C Prévost, *Le dandysme en France*, Genève-Paris, Slatkine, 1957, p70

11) Stendhal, *Rome, Naples et Florence en 1817*, Paris, Delaunay, 1817, cité par Prévost, *op.cit.*, p71

12) Stendhal, *De l'amour*, Paris, Mongie, 1822, II, 11-12

自惚れた、着飾った若者を表す名詞」と訳している。他にも1821年、ロンドン在住のフランス人が、ダンディの「礼儀作法に反する」振る舞いについての逸話を伝えている<sup>13)</sup>。

このように、当初「ダンディ」という言葉は、自己中心的で、軽薄で、虚栄心が強く、礼儀作法を尊重しない者を意味したのである。いくつかの肯定的な解釈はあるにせよ<sup>14)</sup>、1820年代を通じ、この否定的イメージはあまり変化がない。ジャック・ブーランジェが言うように、もし「ダンディ dandy」や「ファッションナブル fashionable」、「黄手袋 gants jaunes」、「ライオン (lion)」といった言葉が、同じ着飾った男性を表す表現であるなら、シャトーブリアンの証言はスタンダールの意見と一致することになる。つまり、

1822年のファッションナブルは一見して不幸で病的な人物であった。その人物像には何かだらしなさが見て取れた。例えば長い爪や、生えそろっているわけでも、剃っているわけでもない伸びた髭、(…)風になびく髪の毛、深く、崇高で、錯乱し、悲観的なまなざし。人間に対する軽蔑を示す口元。存在することへの嫌悪と神秘に浸った、退屈した、バイロンの心情<sup>15)</sup>

1820年代末に至るまで、ダンディに対する証言はネガティブなままである。例えば、「自惚れの強い(…)、性別が不確かな怪物<sup>16)</sup>」といったものである。

1820年代の「ダンディ」という言葉のイメージをまとめると、才能も野

13) cf. Jacques Boulenger, *Les dandys*, 1932, Calmann-Lévy, p41

14) 例えばウーゼーブ・ド・サルは、1822年に以下のように述べている、「ロンドンでは、ダンディ達は自惚れがよい教育を受けた証だと信じているようである」Arcieu (Eusèbe de Salle), *Siorama de Londres, ou Tableau des mœurs britanniques en 1822 ; par M.E.D.S. Arcieu*, Paris, Delaunay, 1820, p138, プレヴォーによる引用, *ibid.* p73

15) Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe* (初版: 1849), Le Livre de Poche (Librairie Générale Française) 3 volumes, Tome II, pp523-524

16) Eugène Ronteix, *Manuel du fashionable ou Guide de l'élégant*, Paris, Audot, 1829, p19

心もなく、着飾ることに関心があるが、上流階級の礼儀作法を無視する、自惚ればかりの強い男性、ということになる。彼は自分が寄生する上流社会の規範（礼儀作法）には従わないが、そこから完全に離脱しようとはしない。彼は属する階級の者を軽蔑するが、自身の存在を保証するのは、その軽蔑する者たちの視線なのである。もし彼が自らの姿で他者の視線をひきつけなかったのなら、彼の存在は無視され、文学に、そして普通名詞として辞書に残ることもなかったであろう。今日では着目されない、ダンディの特性の一つがこの点にある。ダンディが他者に対して尊大な態度をとるのは、下層階級の者や田舎者のように礼儀作法を知らないからではない。それは上層階級に対する反発である。然し、それは階級を打倒しようという、革命を志した行為ではない。なぜなら、その階級こそが彼の存在を保証しているからである。

1820年代の終わりになると、ファッションに関心を持つ男性に対する好意的な意見が見られるようになる。例えば、ウージェーヌ・ロンテックスはダンディとファッションナブルとを対比し、ダンディが「大きなクラヴァットを着け、顔のむくんだ面に巨大な片眼鏡をつけて」間抜けな風体であるのに対し、ファッションナブルは「服の着こなし方や食事の作法、歩き方、話し方、恋愛手法、睡眠術まで……一言でいえば、人生を楽しむ方（art de vivre）」を心得ているのである<sup>17)</sup>。1822年におけるシャトーブリアンの評価とは異なり、1829年のロンテックスの論評において、ダンディとファッションナブルは異なった人物となっている。次章で考察するように、ファッションナブルの生き方はバルザックの「優雅な生活」の先駆けとなっている。言い換えれば、ダンディが上流階級の慣習を侮蔑するのに対し、ファッションナブルは礼儀作法をわきまえ、その art de vivre は処世術に則っているのである。この風俗に関する思想の発展において、1830年、つまりバルザ

---

17) Eugène Ronteix, *Manuel du fashionable / Guide de l'élégance* (1829) 引用は以下による。  
Arnould de Liedekerke, *Talon rouge*, Paris, Olivier Orban, 1986, p60

ックの『優雅な生活論』が発表されるのと同年、同じ『モード』誌上で新たな男性ファッションに関する考察が発表される。オーゲールという筆者は以下のように記している、「服を着るということは社会的要請である。身だしなみは政治に無縁ではない<sup>18)</sup>」バルザックはこの考えを『優雅な生活論』の中に取り入れてゆくことになるだろう<sup>19)</sup>。

ダンディのイメージの変化に戻ろう。ここまで見たように、1820年代から30年代初頭に至る過程で、フランス社会では「ダンディ」という言葉はネガティブな意味しか持たなかった。しかし、そのイメージは徐々に変化してゆく。アルフレッド・ド・ミュッセの文には、その痕跡がある。ミュッセは1830年の『スペインとイタリアの物語』において、ダンディの王ブランメルの外見を「おぞましい」と評している<sup>20)</sup>。1831年にも以下のように記している、

イギリスのダンディとは何か？世の中すべてを無視する術を知った若者のことだ。犬や馬、鶏、ポンチ酒の愛好家のことだ。彼は唯一のこと、つまりは自分のことしか知らない。彼は青年期に蓄積し、心を干からびさせた、自己中心的で孤独な思考を、歳をとることで社会へと発散させるのを待っている。我々が望むのはそんな者になることなのか？<sup>21)</sup>

この無為の若者に対する軽蔑は後に和らぐことになる。『二人の恋人』（1837年）の序文において、作者は「定期的に舞台初演すべてを観覧することや、まだ殆ど出回っていない苺を食べること、煙草を一服すること、人々の話題になっていることや、笑うべきこと、最近の裏話などを知って

---

18) Auger, *La Mode*, janvier-février 1830. 引用は以下による。Henriette Vanier, *La mode et ses métiers - Frivolité et luttes des classes - 1830-1870*, Paris, Armand Colin, 1960, p14

19) cf. 『優雅な生活論』第5章格言40「服装は社会の表現である」

20) cf. Alfred de Musset, *Mardoche*, XLIV

21) Alfred de Musset, « Chute des bals de l'Opéra », dans *La revue fantastique*, 14 février 1831. 引用はプレヴォーによる。Prévost, *ibid.*, pp76-77

いること、金額の高いものなら何にでも賭けをして、翌日笑顔を見せつつ支払いをすること」に「最高の幸せ」を感じると述べている<sup>22)</sup>。プレヴォーはこのミュッセの態度をダンディのものだと捉えている<sup>23)</sup>。我々としては、ミュッセがこの時期、『二人の恋人』の主人公ヴァランタン同様、自己中心的な浪費に否定的でないことを認めるに留めよう。つまり、7月革命のあった1830年前後とその後では、ミュッセの嗜好に変化があったとだけ述べておく。

前後するが、1835年に初めてダンディ（ズム）に対する好意的な表現が記される。すなわち、「上品なダンディズムは服装における個性を否定しない、特にブローニュの森での散歩や乗馬の場合などでは<sup>24)</sup>。」「上品な（de bon ton）」という形容詞句が付くにせよ、それまでのネガティブ一辺倒な意味からは変化している。同年、フランス語の辞書に初めて dandy という語彙が掲載される。アカデミー・フランセーズ辞典は以下のように定義している、「英語由来、フランスにおいても、身だしなみに夢中になった愚か者、気取った外見の男性を意味する<sup>25)</sup>」。この定義においても、いまだ否定的な意味で用いられている。

ダンディが今日的な、積極的な意味合いで使われるようになるのは、バルベール・ドールヴィーの『ダンディズム』（1845年）を待たねばならないだろう。ダンディズムとは見かけのファッションだけではないのだ。この点については、のちの第4章以降で確認してゆくが、ダンディのイメージの変遷を素描するため、予めバルベールを引用しておく、

ダンディズムとは着こなしの技、身だしなみと外見の優美さにおける大胆

22) « Une page inédite d'Alfred de Musset », in *Le Gaulois*, le 22 août 1896, p1 引用はプレヴォーによる。Prévoist, *ibid.* p77

23) Prévoist, *op. cit.*, pp76-78

24) *La Mode*, 24 mai 1835, 引用はプレヴォーによる。Prévoist, *ibid.*, p80

25) cité par Liedekerke, *op. cit.*, p59



かつ適切な裁量のことであった。確かにそうであるが、然し、それ以上のものでもあるのだ。ダンディズムとは生き様であり、単に目に見える物質的側面だけではないのである

さらに1846年、シャトーブリアンは以下のように記している、

こんにち、ダンディは自信家で、軽妙かつ不遜でなければならない。身だしなみに気を配り、口髭か、エリザベス女王のひだ襟のように、あるいは太陽の光輝く円のように、丸く調えられた顎鬚をたくわえなければならない。頭には帽子を被り、ソファーに横たわり、彼に見とれて椅子に腰かけた女たちの面前に足を向けて、独立不遜の性格を示さねばならない<sup>26)</sup>

このように、1840年代以降になると、「ダンディ」という言葉自体がファッションや身だしなみだけでなく、性格を示す表現へと変化してくる。

バルザックは男性のファッションが社会的表現として重要であることに着目した最初の人物の一人である。そして、ミュッセのように、バルザックにおいても社交的な男性像は次第に肯定的に扱われるようになるだろう。更に、「ダンディ」が「優雅な生活」にとって代わることになる<sup>27)</sup>。しかし、後に見るように、バルザックのダンディは、バルベールのそれとは異なる。バルザックのダンディは常に野心的で、社会階級の階段を登ろうと腐心する。言い換えれば、優雅な生活を目指すのである。

26) Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe* Tome II, *op. cit.*, p524. ジャック・ブーランジェはこの文章は1839年のものだとして記している。cf. Jacques Boulenger, *Les dandys*, *op.cit.*, pp47-48. ブーランジェは『墓の彼方の回想』の結末を記していた時期を想定しているが、1846年に改稿されている。cf. *Mémoires d'outre-tombe*, *ibid.* p515

27) プレヴォーの言葉を援用しよう、「1830年以前にはフランスでダンディズムはさほど重要ではなかった。ダンディとはルイ・フィリップの統治時代の現象なのだ。この点でバルザックの作品自体がそれを認めていない。(…) そもそもバルザックの作品によくダンディが描かれるようになるのは1834年以降のことである」Prévost, *op. cit.*, p129

もう一つ、注意すべきことは、『優雅な生活論』が執筆された時代は、フランスの変革期にあったということである。一方では旧態然としたアングロマニーへの嫌悪と、もう一方では7月革命後の社会を担いつつある階級の出現である。この2つに即したライフスタイルの創出がバルザックのテーマとなったのである。

## 第2章 『優雅な生活論』

どんなに教育しても、庶民に趣味は与えられない。

ルイス・ブニュエル『ブルジョワジーの秘かな愉しみ』

(風間研 『パリの文化誌』より)

### ダンディとパリ

フランス革命と第一帝政ののち、パリは多くの地方人や外国人をひきつけることになる。パリが現在の容貌を呈するのは第二帝政だが、19世紀における変貌は街の風景だけではなく、共同体の構成と社会階層の変化も伴っていた。当時出版された多くの「生理学 *physiologie*」は、パリに暮らす多様な人々の姿を描き出しているが、その多くが地方人や外国人であった<sup>28)</sup>。

「生理学」の成功は二つの事柄を示している。第一に新聞王エミール・ド・ジラルダンによる、安価な購読料の新聞や雑誌の発刊と、それに伴う多くの読者の獲得である。1815年からのおよそ30年間の間に、日刊紙の読者は30倍に膨れ上がった。それにより、風俗案内、人物スケッチなどが人

28) ベンヤミンは以下のように綴っている、『『生理学』と銘打たれたポケット版の、じみな小冊子の数々が(…) 追及している対象は、市場を実地に見る人間が出逢う諸形態があって、大同の行商人からオペラ座のロビーにたむろする伊達男に至るまで、パリの生活をいろいろ人物で生理学者の眼を逃れた者は、ひとりもいなかった』ヴァルター・ベンヤミン Walter Benjamin, 野村修編訳「ボードレールにおける第二帝政期のパリ (1938)」、東京、岩波書店(岩波文庫)、1994、pp 171-172

気を博したのである。そして、その「生理学」は、パリの雑踏に生息する人々を判別することにもなった<sup>29)</sup>。オスマンのパリ改造以前には、様々な階級の人々が棲み分けすることなく共同体を形成していた。フィリップ・アリエスは述べている、「1830年のブルジョワ階級は、まとまりのある、均質なブルジョワ居住地に住んでいなかった。下層階級や、時には貴族が、ブルジョワの住む建物の上階や中庭の先、屋上階といった、身近な場所に住むことで、まぎれこんでいた<sup>30)</sup>」要するに、1830年のパリでは、今日でいうブルジョワと大衆の棲み分けはなく、あらゆる階級の者が同じ地区に共生していたのである。この共生は東部の工業化とパリ改造の時期の移住によって解消される。

第二に新たな地方人の、パリへの移住である。この新たなパリジャンたちは、当時人口が少なく、工業化のために人手を必要としていたパリ東部地区に住むことになる。こうして中世の旧市街周辺に新興地区が広がってゆく。パリへの新参者たちの中には、既存の上層階級へと潜り込もうとする者（例えばバルザック『幻滅』の主人公リュシアン・ド・リュバンプレ）や、逆に群衆に紛れこみ、自らの正体を隠し暮らす者（例えばヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』の主人公ジャン・ヴァルジャン）もいた。

こうした新参者の社会階級を示すものとして顕著なのが服装であった。すでに1793年の国民議会の公布により、服装の自由は保障されていたが、服がたやすく入手できるようになるのは、1820年代に服飾産業がパリで行われるようになってからである<sup>31)</sup>。言い換えれば、服装の自由は実際に可能となったのはこの時期からで、このことは第2章で見たように、社交界

---

29) 「判別化」は体制によっても行われていた。ベンヤミンは述べている、「広がる管理の網は、フランス革命以降、市民生活をますますがんじがらめに、その網目の中へ押し込めてきていた。この規格化の進展を測るよい手掛かりとなるのは、大都市での家屋番号制度である。ナポレオンの治世下の1805年、この制度はパリに義務づけられた」Benjamin, *ibid.* p189

30) Philippe Ariès, *Histoire des populations françaises*, Paris, Seuil, 1971, p131

31) ジル・リボヴェツキーは述べている、「フランスでは1820年代からイギリスを模倣して新品で安価な大量生産の服が作られ始めた。そして、1860年前後のミシンによる機械生産の時

における男性のイメージの変化とも一致する。以後、社会の発展とともに男性ファッションも発展し、それは新たな社会階級を表す象徴となる。こうして、服装は所属する階級の象徴として機能し始めるのである。

バルザックの『優雅な生活論』が記されたのは、こうした状況下である。「優雅な生活」は「外見的、物質的に洗練された生活」定義するだけでなく<sup>32)</sup>、それは「感情」をも必要とする<sup>33)</sup>。我々はまずこの「感情」について考察してゆく。

作者は人間存在を3つのカテゴリーに分類する。すなわち「暇なし生活」、「芸術家の生活」それに「優雅な生活」である。もし文字通りに理解するなら、この『優雅な生活論』が向けられたのは、第3のカテゴリーの人々、すなわち「高官、高位聖職者、将軍、大地主、王侯」たちと考えられる。しかし、この論が向けられているのは単に生まれながらの貴族や王侯ではなく、寧ろ新興勢力であったブルジョワジーに対してであると思われる。なぜなら、「優雅な生活」とはナポレオンが皇帝になった後の思想であり、「1804年の貴族も、紀元1120年の貴族も、もはや何の意味も持たない。大革命とはまさしく特権に対する十字軍であったのであり、その使命もまったく無駄ではなかった<sup>34)</sup>。」たとえ「金持ちになったり、金持ちに生まれたからといって、優雅な生活を送れるとは限らない<sup>35)</sup>」のである。

この点から『優雅な生活論』は、フランス革命後の新興ブルジョワや、階級意識のある上流階級に向けた手引きであるといえよう。その目的は自らの外見を通じてその権力を示すことにある。そして、そのコンセプト、すなわち新たなライフスタイルを提示するのが芸術家の役目なのだ。

---

代に入る前、すなわち1840年代以降、それは大発展を遂げた」 Gilles Lipovetsky, *L'empire de l'éphémère – la mode et son destin dans les sociétés modernes*, Paris, Gallimard, 1987, p82

32) バルザック (山田豊子訳) 『風俗のバトロジー』, 東京, 新評論, 1982

Balzac, *Traité de la vie élégante*, Paris, Arléa, 1998, p18

33) *ibid.*, p24

34) *ibid.*, p25

35) *ibid.*, p22

芸術家は常に偉大である。自分だけのお洒落、自分だけの生活を持っていて、何をしようと彼ならではの知性と栄光が輝くのだ。だから芸術家と同じ数だけ、独自の思想に輝く生活があることになる<sup>36)</sup>。

そして、この『優雅な生活論』を記しているバルザック自身が、その芸術家を代表している。アンヌ・ベルクが指摘しているように、ロマン主義左派の芸術家たちは、1830年革命失敗によって落胆し、新たに台頭してきたブルジョワ勢力と妥協する必要があったのである<sup>37)</sup>。芸術家は民衆に進むべき示すことのできる存在なのである。

さて、バルザックは現状の社会体制を以下のように示す。

今日の社会には、失墜した笑うべき封建制に代わって、金銭、権力、才能という三大貴族階級が存在するのではなかろうか。この新しい貴族階級は、どれほど合法的であろうとやはり大衆に重圧を課していることに変わりなく、銀行という名のローマ貴族制を押しつけ、与党の力にものをいわせ、また才能のある人々は新聞や論壇から砲火を放ちながら大衆の上に立とうとしている。こうしてみると立憲王政に復帰したフランスは、欺瞞的な政治的平等をかざしつつ、実は悪を一般化したに過ぎない。要するに、現代は金持ちの民主主義の時代である<sup>38)</sup>。

1789年と1830年の革命後、普通選挙を求めてみても民衆の革命は不可能である<sup>39)</sup>。いくら体制を転覆してみたとしても、それは「悪を一般化した」にすぎない。バルザックが着目したのは、体制を変えることよりも、既存の体制、つまりは「金持ち民主主義」の中でどのように行動するかである。

---

36) *ibid.*, p15

37) Annie Berq, « Baudelaire et "l'Amour de l'art" », dans la revue *Romantisme*, no. 17-18, Champion, 1977, p75

38) *ibid.* p24-25

何らかの才能を持つだけでは十分ではない。金の権力によってすべてが制度化した世界にあって、どのようにして成りあがってゆくのか、戦略が必要なのである。この論において「感情」が意味するのは、物質的外見によって示される思考である。こうして、優美さは単なるファッションではなく、政治的武器になる。ブルジョワ階級はこの手段によって自らの権力を誇示する。この政治的意味合いから、「優雅な生活」は「ダンディズム」と異なるであろう。

また、バルザックの描き出す優雅さとは、人生の様々な事柄との調和、流行との調和を求める。すなわち、単に服装だけでなく、アクセサリや家具、家など、ライフスタイル全般にわたるものである。実際にバルザックが自分の言う「優雅な生活」を実践していたかどうかは疑問が残る<sup>40)</sup>が、論の中で推奨されるのはあまり高価すぎず、すぐに買い替えの利く交換可能なものである<sup>41)</sup>。質の良い、高価な服を買うよりも、毎シーズン手ごろな値段の服を買うことを勧めている。なぜなら、流行とは変化し、それは進歩と歩をともしにするからだ、「流行 (la mode) は進歩を歓迎し、進歩を喧伝しつつ、万事の先端をきる<sup>42)</sup>。」流行は代替え可能なだけでなく、発展的である。それは常に自分の存在様式 (le mode) をかたくなに守り続けるダンディとは対照的なものである。ダンディは常に同じスーツを、同じ風に着るのである。バルベーを引用しよう、「ダンディズムとは存在のあり方であって、単に物理的な外見ではない<sup>43)</sup>」。ダンディは自分の愛用するものを生涯使い続ける<sup>44)</sup>。優雅な生活においてはこのようなフェティシズ

39) *ibid.*, p32

40) cf. 「バルザックは『優雅な生活論』においてダンディズムの過剰さを批判しているが、バルザック本人がひどい色彩の派手なスーツ姿でドラクロワを驚かせている」 Liedekerke, *op. cit.*, p56

41) *op. cit.*, p58

42) *op. cit.*, p30

43) Barbey d'Aureville, *op. cit.*, p44-45

44) 「その身なりは終生を通じてほとんど変わることなく、どこへ出かけるにもその服装で押し通すのだった」 生田耕作, *op. cit.*, p39

ムはない。換言すれば、ダンディズムは「富の上に築かれた民主主義」に、代替可能な流行に、軽蔑を示す。

先ほど優雅な生活とは思想の表現であり、ダンディズムとは異なると述べた。ダンディという語が、1830年ごろまでファッションにのみ関心を持つ者を示していたことは既にみたが、社会的な上昇志向も、上層階級にとどまろうという意識もない点で優雅な生活とは異なっている。ダンディズムはいかなる政治的野心も持ち合わせないのだ。

しかし、政治思想の欠如は、必ずしも思想そのものの欠如を意味しない。一例をあげれば、ダンディの王ジョージ・ブランメルである。勿論バルザックが描いた架空のブランメルではない。

ブランメルの伝記を記したキャプテン・ジェスによると、実際のブランメルは両親ともに平民の家庭に1778年生まれた。元英国首相の私設秘書を務めていた父の財産によって、平民の出自ながら、貴族の子弟の通うイートン・カレッジに入学できた。その洗練された身だしなみと、立ち居振る舞いで、ボー（Beau、フランス語で「美男」の意）ブランメルと呼ばれるようになる。イートン校在学中に叔母の家で皇太子と出会い、進学予定であったオックスフォード大学卒業後、近衛第十軽騎兵隊に入隊を勧められる。1796年には若干18歳で大尉に昇進し、英国軍で最も壮麗な部隊の、最も若い隊長になる。しかし、1799年、マンチェスターへの赴任が決まると、ロンドンに残るためだけに職を自ら辞任した<sup>45)</sup>。ジェスは、ブランメルの判断を「常軌を逸したふるまい」だと評している<sup>46)</sup>。その後は社交界に君臨するが、1810年イロニックな言動によってパトロンである皇太子と仲たがいをする。さらに1816年には賭博による借金がかさみ、フランスに亡命、貧困生活を送ることになる。

45) アンリエット・ルヴィヤンは、ブランメルが首都を離れなかった理由を、大都市にいれば自分の収入の少なさを隠せるためだったと想像している。cf. Henriette Levillain, « Élégants et dandys » in *L'honnête homme et le dandy*, Gunter Narr Verlag Tübingen, 1993, p155

46) Captain Jesse, *The life of Beau Brummell*, in *L'esprit dandy*, Paris, José Corti, 1991, p113

ブランメルは将来に対する野心も、計算もなかったのである。彼の職業は——もしあったとするなら——何もしないことだった。バルザックが述べるような、本当の優雅な生活を送る「何もしない人間」というのは、実はブランメルにこそあてはまる。バルザックが例として挙げる官僚、高位聖職者、大臣など、「何もしない人間」は、それぞれ何らかの仕事を持っているのに対し、ブランメルは実際何もしない<sup>47)</sup>。彼は何度も職を得る機会があったし、金持ちになる機会もあった。完璧なプロポジションを持っていたのだから、画家のモデルとして金を得ることもできたであろう<sup>48)</sup>。また、自分の回想録をかなりの執筆料で記すこともできたであろう<sup>49)</sup>。あるいは、彼宛のバイロンやジョージ四世の手紙を売却することで、少なくとも借金を返済することができたであろう<sup>50)</sup>。しかし、彼は生活費を稼ごうとはしなかった。

1829年に彼の忠実な友人たちがカーン領事の職を与えても、すぐにそのポストは不要だと述べ辞職してしまう。1834年以降、半身不随で、何もしないまま、負債を抱え、1835年には投獄されてしまう。破産し、衰弱し、1837年には発狂し、もはやダンディとしての生活を送ることは不可能になる<sup>51)</sup>。そして異国の精神病院で亡くなることになるのだ。

47) ルヴィヤンは述べている、「ブランメル以降、もし何もしないことが体系的に職業とされたなら、それは軍隊よりも人気のある、誇るべきものとなっただろう」*op. cit.*, p153

48) ジェスの証言を引用する。「ロンドンから亡命した後、もし金銭を得ようと思えば、画家のモデルをしたり、古代ギリシャ像のようなその姿を人々に見せれば、たやすく稼げたであろう」*ibid.*, p114

49) Barbey, *op. cit.*, p104

50) ロジェ・ケンプは記している、「もし破産したブランメルがバイロンや王室、あるいは英国の名士からの手紙を売却することに同意していたのなら、彼は釈放され、金持ちになっていただろう。しかし、そうすれば、旧友たちを巻き添えにしたことだろう。ブランメルは他人に恥をかかせるよりも、投獄を選んだのである」Roger Kempf, *Dandies, Paris, Seuil*, 1977, p42

51) トム・ムーアは見舞いの後で記している、「哀れなボー（美男子）・ブランメルは正気を失った。その姿はあまりにも変わり果てていて、彼だと思えなかったほどだった。夕食の間、何を話しているのかわからなくなることが何度かあった」引用は以下による。Patrick Favardin et Laurent Boüxière, *Le dandysme*, Lyon, La manufacture, 1988, pp34-35



彼は生涯唯一の仕事に忠実だった、即ち、何もしないということである。この生産への拒否と富への無関心には意味がある。他者からの独立である。彼は意図的に何もしないのである。自分に属さないものに対し、完全な否定をする。人によってはこの態度を馬鹿げたものとするであろうし、また、ボードレールのような者にとっては英雄的な行為と思えるだろう。いづれにしろ、ある意味でバルザックは正しい。すなわち、「ダンディズムとは、優雅な生活の邪道である」ということだ。優雅な生活が目指す「何もしない人間」を体現するにせよ、ダンディは将来の野心や計算も持ち合わせない。良くも悪くも自らに忠実であるのだ。

「優雅な生活」と「ダンディズム」を比較すると、その優美さ自体が異なっていることがわかる。ダンディにとっては、優美さとは生得的なものであり、社会階級を昇る前から備わっているものである（バルベールに言わせればそれは「天性の資質」である）。それに対し、「優雅な生活」は後天的で、習得するものである<sup>52)</sup>。ダンディは生まれながらの優美さによって支配者になるのに対し、優雅な生活者は優美さを成りあがりの手段として、そして自らの地位を確かにするため、利用する。ダンディは自分の属している階級から際立つことを望み、優雅な生活は階級への帰属を志向する。ダンディにとってそのファッションは純粋な消費であるのに対し、優雅な生活者にとっては利用価値である。

視点を変えると、2つの違いは、それぞれを生み出した社会体制の違いとも言える。19世紀初頭のイギリスは絶対王政の時代で、ブルジョワ階級が貴族階級に至ることはほとんど不可能であった。それに対し、フランスでは、ブルジョワ階級が台頭し、7月王政による富裕層による民主主義が可能となった<sup>53)</sup>。このように、「優雅な生活」と「ダンディズム」とは、根

---

52) cf. Balzac, *op. cit.*, pp42-43

53) バルベールはダンディズムの発生を社会体制に起因させている、「ダンディズムを生み出した社会が変貌すれば、ダンディズムはもはや存在しないであろう」*op. cit.*, p112

本的に異なっているのだ<sup>54)</sup>。

社交性の面において、バルザックは優美な男性を魅力 (la grâce) に従って3つのカテゴリーに分類している<sup>55)</sup>。最初のカテゴリーの人物は「充分な魅力がある人物」で、彼の優美さは規則的である。第2のカテゴリーの「本質的な魅力のある人物」の優美さは計算づくである。そして第3のカテゴリーにあたるのは「聖なる相伴的魅力のある人物」で、感じがよく繊細で、純真で不自然さがない<sup>56)</sup>。この人物の持つ能力こそが「優雅な生活」の大いなる目的である、と作者は述べている。

この点から考えると、優雅な生活とは規則的でも計算づくでもないことになる。言い換えれば、本当の優美さとは習得できることではなく、貴族の称号のように生得的なものだ。そもそも、格言9において、バルザックは「金持ちにはなれるが、優雅は生まれつきである<sup>57)</sup>」と述べている。もしそうであれば、この論は構造的に破綻しているといえるだろう。

ここに『優雅な生活論』の限界と魅力がある。すなわち、社交における本当の魅力は思考や計算を超えたものであり、富に基盤を置いた社会階級を超えたものと考えられるからだ。経済力によってある程度の優美さを作り出すことはできても、本当の優美さはその経済力を超えたところにあるといえる。

### 第3章 『ダンディズム』

私の父はとても威厳のある召使いでしたが、終生その地位に留まることを心得ておりました。

ジョージ・ブランメル<sup>58)</sup>

先の章で「魅力 grâce」について考察したが、バルベールもダンディの魅力について考察している。そもそも、バルザックとバルベールを対立させているのは、ファッションとしてのダンディズムではなく、思想としてのそれなのである。バルベールは英国社会を語りつつ、不自然さのない魅力さえ

否定している、「(英国社会の) あらゆる先入観に冒され、感情を失った人々を感動させるのに、率直で、純真で、天真爛漫な魅力が十分な刺激となるであろうか<sup>59)</sup>」。バルベールの語るダンディも、人々を引き付ける力を持っている。しかしそれは作為的で悪魔的なもの、すなわちイロニーである。イロニーはそれを用いる人物の周囲を少しづつ蝕み、それを用いる者から人々を遠ざけてしまう。そして最後にはそれを用いる者自身をも滅ぼしてしまう。しかし、この悪魔的な力こそがダンディには必要であったのである。バルベールは述べている、「もしその魅力が真摯なものであったのなら、それは作為的な社交界を魅了することはなかったであろう<sup>60)</sup>」。ブランメルが英国の貴族社会で成功しえたのは、その人為的な言動や立ち居振る舞いによってだった。彼がその上層階級への昇進を望んだのではない。むしろ貴族社会が彼を望んだのである。ブランメルのイロニーとは、英国社会を反映していたのである。バルベールは述べている、「偽りの社会で最も心に響くのは(…) 偽りの魅力だけであろう<sup>61)</sup>」。この理由からバルベールはダンディズムとは封建社会であるイギリス特有の事象であるとしているのだ。

## ブランメルのイメージ

役に立つ人間であることは、私には常にとても醜悪に思えた。

54) ファヴァルダンとブエクシエールはバルザックの小説における登場人物を評して、以下のように述べている、「アンリ・ド・マルセーやマクシム・ド・トラージュ、ラスティニャック、そして『13人組物語』の登場人物たちは、単にうぬぼれの強だけでなく、危険な人物でもある。彼らの冷酷さや不遜な態度は、野望や成りあがるためのものであり、本当のダンディには備わっていない事柄である」 *op. cit.*, p81

55) Balzac, *op. cit.*, pp62-65

56) Balzac, *op. cit.*, pp62-64

57) Balzac, *op. cit.*, p29

58) Favardin et Bouëxière, *op. cit.*, p27

59) Babey d'Aurevilly, *op. cit.*, p111

60) *ibid.*, p111

61) *ibid.*, p112

ここまで見てきたように、『優雅な生活論』と『ダンディズム』ではかなりの違いがあるにもかかわらず、バルザック、バルベール双方がブランメルに魅了されている。バルザックはその論にブランメルとの架空の対話を挿入している。実際にバルザックがブランメルに会った可能性はあり得た。なぜなら、ブランメルは1829年にカーンの領事に任命され、1830年の9月、パリにつかの間の滞在をしているのだ。さらに興味深いことに、バルザックはブランメルを「ダンディズムのかつての神」だと見做し、優美さの審判者であると記していることである<sup>62)</sup>。もし「優雅な生活」が一つの教義であるなら、それを決めるのはダンディであるブランメルなのだ。つまり、ダンディが決めたことにバルザックは従うということになる。しかし、すでに述べたように、バルザックにとってダンディズムとは、「優雅な生活」の邪道でなかっただろうか？ブランメルが時代のファッションを創造したのは確かである。しかし、彼は美の教条的な理論家ではなかった。ダンディは寧ろ、既存の規則を否定することでその存在を示していたのである。このことをバルベールは以下のように述べている、

(…)ダンディ達は、最も伝統的で、最も貴族的な集団を支配する規則の上  
に、個人的な権威によってさらなる規則を据えたのである<sup>63)</sup>

つまり、ほんとうのダンディなら、バルザックの提示する規則さえ否定するであろう。この意味でバルザックが描き出すブランメル像はダンディではない。それ故、ブランメルは「ダンディズムのかつての神」とされているのかもしれない。バルベールはブランメルにダンディの精神性を見出し

---

62) *op.cit.*, p 36

63) *op.cit.*, pp57-58

ているが、バルザックは自らの格言や教条に権威をもたらすため、「かつてのダンディ」としてのブランメルを用いているようだ。このように、バルザックのダンディに関する態度は変化し、しばしば全く逆の姿を示すことになる<sup>64)</sup>。しかし、ブランメルをダンディと認めないのは、バルザックだけではない。ブランメルの最後の友人で最初の伝記作者、キャプテン・ジェスもその一人である。彼は1844年以述べている、「(ダンディという)この言葉は、すべて下品な、様々な考えを想起させる<sup>65)</sup>」ダンディという語彙はこのイギリス人にとっては当時も否定的な意味合いしか持たなかった。すでにフランス語での用法を見たように、英語においても dandy とは派手に着飾った若者たちを意味し、さらにはプレヴォーが指摘しているように、当時の一般のイギリス人にとってダンディズムという言葉は、深い意味を持たなかったのである<sup>66)</sup>。バルザックとジェスは、否定的意味合いでのダンディからブランメルを救いだしている。彼らが評価した、ブランメルにおけるファッション革命は、色彩の落ち着きと、余分なものを取り除いたシンプルさにあった。この点はバルベールも同様に、何度も強調している<sup>67)</sup>。その論旨の特徴は、ダンディズム自体の肯定にある。バルベールはブランメルとダンディズムを結びつけることによって、それまで下品とみなされてきた虚栄心に積極的で、繊細な、歴史的な意味を与えた。バルザックがファッションを経済として示しているのに対し、バルベールはファッションを単なる虚栄として示す。ブランメルの姿を通じて、前者がファッションの有用性を示すなら、後者はその虚無性を示す。バルザックは落ちぶれたブランメルの名誉を救おうとするのに対し、バルベールはその苦境に至るまでの虚栄心を称賛しているのだ。

---

64) Liedekerke, *op. cit.*, p55

65) Jesse, *The life of George Brummell, op.cit.*, p116

66) Prévost, *op.cit.*, p32

67) 例えば、バルベールは以下のように述べている、「ブランメルの壮麗さとは、派手ではなく知的なものであった。(…)彼は後に、身だしなみに関する以下のような箴言を述べるだろう、「見事な服装とは、目立ってはいけない」*ibid.*, p71

## 結論

以上のように、バルザックの『優雅な生活論』とバルベールの『ダンディズム』の違いを考察すると、バルザックの述べる「ダンディズムとは優雅な生活の邪道である」という言葉は、なるほど理にかなったものに思える。しかし、この論が出版された折に本当にダンディズムが邪道であったのかは疑わしい。なぜなら、『優雅な生活論』は、フランスで封建制が崩壊した後に執筆されたからだ。しかし、7月革命後のフランスで、男性ファッションの意義が増していったのは確かであり、同時にバルベールが掲げるようなダンディズムは廃れてゆき、のちにボードレールが示すことになる、資本主義に基づいた民主主義への抵抗へと姿を変えてゆくであろう。

ブルジョワ社会で生まれる優雅な生活者は、旧体制の貴族とは異なる。前者の身だしなみは富により、後者のそれは家柄による。

『優雅な生活論』の発表は、ブルジョワ階級の台頭と一致するだけでなく、資本主義のそれとも重なる。ブルジョワ階級が着ることのできる、比較的安価な洋服が製造されるようになるのは、イギリス産業革命の伝播による。この革命は男性ファッションの発展にも貢献する。以降、男性ファッションの流行が顕著になってゆくであろう。

外見は社会階級を示すものであり、「優雅な生活」は単なる物質的なものではない。それはバルザックの述べる「感情」であり、その感情が表される外見は、資本主義社会でよりうまく生き抜くための手段となる。こうして新たな支配階級が、自らの階級を示すファッションを身に付け、社会を支配してゆく。この意味で『優雅な生活論』は新たな支配階級のためのマニュアルとなる。

ダンディズムは、フランスでは1830年まで単なるイギリスからもたらされたファッション、風俗であり、それはとりわけネガティブな事象と考えられた。ダンディは、自らだけに興味のある、優美さを誇るうぬぼれ屋を意味した。その姿は派手な服装とブランメル純白なスカーフによって示

された。バルザックは自論でブランメルを優美さの助言者として採用し、それまで否定的に用いられていた「ダンディ」という用語から彼を救い出した。15年後、バルベール・ドールヴィイも同様にブランメルのイメージ回復を試みた。しかし、彼の企ては「ダンディズム」の意味自体の変貌を含めていた。彼は単なる着せ替え人形のように扱われてきたブランメルの姿を否定するだけでなく、ダンディズムの精神性を描き出そうと試みた。この精神性とは「虚栄心」に他ならない。虚栄心はそれまで悪徳としてみなされ、軽蔑されてきたが、バルベールはこの虚栄心自体の価値を主張する。こうしてバルベールはダンディズム特有の思想を示すことによって、バルザックに反論している。バルザックが『優雅な生活論』で男性ファッションを大衆化するのに対し、バルベールは『ダンディズム』において虚栄心を男性の価値として提示する。

以上のように、この2つのテキストの対立は注目すべきものである。この対立は対象となる社会構造の違いに起因する。ダンディズムは英国の絶対君主制において誕生し、優雅な生活はフランスの資本主義に立脚した社会で誕生したのである。この点から、両テキストは社会構造の研究としても読まれうる。

#### 参考文献

- Ariès, Philippe *Histoire des populations françaises*, Paris, Seuil, 1971  
Barbey d'Aurevilly, Jules *Du Dandysme et de George Brummell*. Paris, Édition Payot, 1997  
Barbey d'Aurevilly, Jules *De Balzac à Zola*, Paris, Les belles lettres, 1999  
Balzac, Honoré de *Traité de la vie élégante*, Paris, Arléa, 1998  
Benjamin, Walter *Charles Baudelaire*, Edition Payot, 1979  
Berq, Anne «Baudelaire et “l'Amour de l'art”», in *Romantisme*, no. 17-18, Champion, 1977  
Boulenger, Jacques *Les dandys*, Paris, Calmann-Lévy, 1932,  
Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe* (Edition originale en 1848), Paris, Le

- Livre de Poche, 2000
- Favardin, Patrick / Bouxière, Laurent *Le dandysme*, Lyon, La manufacture, 1988
- Jesse, (Captain) *The life of Beau Brummell, in L'esprit dandy*, Paris, José Corti, 1991
- Kempf, Roger *Dandies*, Paris, Seuil, 1977
- Levillain, Henriette « Elégance et dandys » in *L'honnête homme et le dandy*, Gunter Narr Tübingen, 1993
- Liedekerke, Arnould de *Talon rouge*, Paris, Olivier Orban, 1986
- Lipovetsky, Gilles *L'empire de l'éphémère – la mode et son destin dans les sociétés modernes*, Paris, Gallimard, 1987
- Musset, Alfred de «Chute des bals de l'Opéra», dans *La revue fantastique*, 14 février 183
- Prévost, John. C *Le dandysme en France*, Genève-Paris, Slatkine, 1957
- Alain Lauzanne, *Les française à l'heure anglaise: l'anglomanie de Louis XV à Louis-Philippe*, Arobase, vol.3, Numéro2 (Internet site)
- Ronteix, Eugène *Manuel du fashionable ou Guide de l'élégant*, Paris, Audot, 1829
- Scaraffia, Giuseppe *Petit dictionnaire du dandy*,
- Stendhal, *Rome, Naples et Florence en 1817*, Paris, Delaunay, 1817
- Vanier, Henriette *La mode et ses métiers – Frivolité et luttes des classes–1830–1870*, Paris, Armand Colin, 1960
- Varèze, Claude «Introduction» in *Traité de la vie élégante*, Paris, Bossard, 1922
- オノレ・ド・バルザック (山田豊子訳) 『風俗のパトロジー』, 東京, 新評論, 1982
- ヴァルター・ベンヤミン (野村修 編訳) 『ボードレール』, 東京, 岩波文庫, 1994
- 生田耕作 『ダンディズム・栄光と悲惨』, 東京, 中公文庫, 1999
- 熊澤慧子 『モードの社会史』, 東京, 有斐閣選書, 1991



## Dandyism in France: Adoption and Transfiguration

Renta KOMURO

## 《Abstract》

This article analyses the adoption of male English fashion in France in the 18<sup>th</sup>-19<sup>th</sup> centuries, focusing on the term “Dandy”. This word is surely due to England, but it became a concept in French democratic society.

The research involves a reading of two significant texts: *Treatise on Elegant Living* by Honoré de Balzac (1830) and *On Dandyism and George Brummell* by Barbey d’Aurevilly (1845) .

In Chapter 1, I investigate the transformation of the term “Dandy” in the French literature of the period from the French Revolution to the July Monarchy. In this phase, French Dandies depended on the democratization of society.

In Chapter 2, my exploration concerns the meaning of male fashion in the 1830’s through Balzac’s text.

In Chapter 3, I analyse the “Spirit” of a Dandy through the essay of Barbey d’ Aurevilly. The notion of Dandyism is no longer centered on one’s external appearance; it has become important internally and psychologically.

